

# 「御用」請負人と近世社会

岩城卓二

## はじめに

- 一 大森代官所の中間支配機構
- 二 郷宿の成立と機能
- 三 郷宿の経営
- 四 中間支配機構における郷宿の位置付け  
おわりに

## 論文要旨

近年、筆者は近世農民支配は武士、「農民」、「御用」請負人の三者によつて成り立つてゐたという立場から、請負人を必要とする近世国家と社会の性格について論じてきたが、いまだ課題は山積している。そこで本稿では請負人の経営実態と請負人の位置付けをめぐる武士、「農民」、請負人三者の関係を明らかにすることによって、請負人の具体像を豊かにすることを目指した。検討の素材にしたのは幕領石見国大森代官所で活躍した郷宿である。

第一章では代官所中間支配機構に介在した郡中惣代、惣代庄屋の役割を概観し、第二章では幕領支配に「御用」の請負人が登場する時期と請負人の役割を整理したが、本稿の検討の中心は続く第三章以下である。

請負人の研究は史料的制約のため機能論が中心であり、その家業の内容についてほとんど論じられていない。第三章ではその研究上の課題に取り組むため、郷宿の収入の内訳と利用状況を検討し、その収入が賄い代、利銀、人足賃

によつて成り立つてゐたこと、私的な「御用」の利用が多かつたことを明らかにした。この検討をふまえ、請負人が宿である必要があつたこと、請負人が私的な利害関係に左右されやすかつたことなどを論じた。

第四章では、請負人は「御用」に関わる下級官吏と考へる武士、請負人は雇用人であるという農民、意識的には下級官吏＝治者と自己認識しながら、実際の行動は農民の雇用人として振る舞わざるをえない郷宿、それぞれの立場を明らかにした。そして武士と農民の立場の違いは「御用」自体の認識の違いであり、その志向する国家や公共性は異なることを論じた。

おわりにでは、近世社会における公職の担い手に対する認識、「御用」請負人の登場によつて成立していった地域社会や公共性が、明治国家の地方自治制改革の課題と密接に関わっているのではないかという展望を示した。